

旭川市役所獣医師 からの挑戦状

動物愛護センター

早く救ってあげよう



Q. 避妊・去勢手術を受けていないメス猫とオス猫が1匹ずついます。1年後、猫は何匹に増えているでしょう？

～回答～

20匹以上に増えます。(環境が良ければ50匹以上になることも...)

また、計算上では、2年後に80匹以上、3年後に2,000匹以上に増えると言われています。

～解説～

猫は交尾排卵するため、交尾すればほぼ100%妊娠し、約2か月の妊娠期間を経て、1回に4～8匹の子猫を出産します。子猫が離乳した後(出産の約2か月後)には次の妊娠が可能になり、年に2～4回出産することができます。

また、生まれた子猫も生後4～12か月で子猫を産めるようになり、親子きょうだい間でも交尾して出産します。



自宅などで猫などのペットが異常に繁殖した結果、適切に飼育できなくなった状態を「多頭飼育崩壊」と言い、社会的な問題となっています。

旭川市動物愛護センターでは、飼い主の皆さんに避妊・去勢手術を行うよう呼びかけているほか、飼い主からの引取りなどにより当センターに収容した犬・猫の避妊・去勢手術を獣医師が行っています。

また、飼い主のいない猫(野良猫)も同様に増えてしまうことから、地域住民からの求めに応じて、これらの猫の避妊・去勢手術も獣医師が行っています。



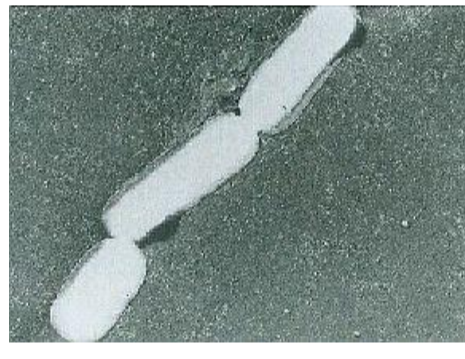
衛生検査課

Q. 次の食中毒の原因菌は何が推定されるでしょうか？

学生寮の8人が、朝食に、昨晚残ったカレーを温め直して食べました。昼食は学校の食堂でそれぞれ別のメニューを食べ、夜は刺身をつまみに寮で飲み会をしましたが、その途中で、8人中6人が腹痛と下痢を呈しました。

～回答～

ウエルシュ菌



～解説～

ウエルシュ菌は動物の腸管内や土壌など自然界に広く分布している偏性嫌気性桿菌です。

潜伏期間は6～18時間(平均12時間)とされており、主な症状として腹痛や下痢が上げられます。また、ウエルシュ菌を含む一部の細菌は、自身にとって都合の悪い環境になると、芽胞と呼ばれる100℃の煮沸でも不活化されることのない極めて耐久性の高い細胞構造を形成します。

また、ウエルシュ菌は増殖速度が速いことも特徴で、5時間あれば1個のウエルシュ菌が食中毒を発生させる数に増殖することができます。



出題文では、昨晚の残りであるカレーが一晩常温で放置されたことで、混入したウエルシュ菌が増殖し、再加熱しても、芽胞を形成するため、不活化させることができなかつたと考えられます。潜伏期間や症状もウエルシュ菌の特徴と一致します。

ちなみに、夜の飲み会で刺身を食べています。生の魚介類を食べることによる食中毒として、アニサキスや腸炎ビブリオが上げられますが、アニサキスは、主に腹痛、嘔吐の症状が現れ、下痢は主症状にはないこと、腸炎ビブリオの潜伏期間は約12時間であることから、夜の飲み会は原因ではないと考えられます。

それでは、今回の食中毒はどのようにしたら防げたのでしょうか。食中毒菌は、10℃～60℃の温度帯で最も増殖すると言われています。そのため、作り置きしたカレーも、1食分ずつ小分け等して冷蔵庫に保管することで、細菌が増殖する時間を与えず、食中毒菌を予防することができます。また、食中毒を持ち込まないために、調理する前には衛生的な服装に着替え、しっかりと手を洗うようにしましょう。芽胞を形成しない食中毒菌については、中心部まで火が通るように加熱することも食中毒を予防するための有効な手段です。

これらの対策をまとめて、食中毒予防の三原則(つけない、増やさない、やっつける)と言います。



【閲覧注意】

※以下、獣畜の臓器や血液の画像が掲載されています。

食肉衛生検査所



Q. 写真の病変はなんでしょう？

①部位(器官)

②疾病

*と畜場法に基づき廃棄対象となった病変(疾病)です

～回答～

①リンパ節(内側腸骨リンパ節)

②牛伝染性リンパ腫

～解説～

牛伝染性リンパ腫は家畜伝染病予防法に基づく届出伝染病です。と畜検査において発見された場合には、と畜場法に基づき当該獣畜の肉、内臓その他全部を廃棄することとされています(いわゆる「全部廃棄」)。旭川市食肉衛生検査所では、肉眼所見にPCR検査及び細胞診等の結果を併せ、措置を決定しています。

今回の写真はリンパ節の断面です。健全なリンパ節に比べて、腫大し、固有構造がくずれ、全体に均一でのっぺりとした質感になっています。こうした全身のリンパ節の腫瘍化は、牛伝染性リンパ腫の特徴的な病変のひとつです。と畜検査においては、心筋(特に心耳)、子宮、第四胃、脾臓などで病変がよく見られます。